

2年英語料の2学期評定

高橋 明浩

1 考え方

- 4月の授業開きにおいて、評定については次のようにプリントで説明してある。

- ・今年から英語の授業では、通知票に書いてある4つの観点（英語の場合、①コミュニケーションに対する関心・意欲・態度、②表現の能力、③理解の能力、④言語や文化に対する知識・理解）を何回かに分けてA（すばらしい）、B（だいたいよい）、C（努力が必要）というように先生が記録していき、それをもとにして5、4、3、2、1の評定を決めていきます。これまでのように「学年の中で5は何人、4は何人、・・・」というやり方ではなく、「ここまでできたら3」というようになりますから、がんばればがんばっただけ成績が上がるようになります。もちろん、オール5をとることも全員が可能です。
- ・中間テスト、期末テストも上のように考えますが、成績の約50%の重みがあります。
- ・提出物（ワーク・ノート・レポートなど）、発言や発表、単語テストなども、A・B・Cでつけていきます。Aをたくさん集めると、評定の5がとりやすくなることでしょう。

2 テストから

- 中間・期末テストとも100点満点で作成。大問ごとに3つの観点を割り振った。「関心・意欲・態度」はペーパーテストによる測定は不可能と思ったため、授業記録からのみ採用。

- ① 表現の能力をみる問題は、中間20+期末20=反応数40。
→ 生徒の点数 \div 40 \times 100で「表現点」を計算。
- ② 理解の能力をみる問題は、中間30+期末23=反応数53。
→ 生徒の点数 \div 53 \times 100で「理解点」を計算。
- ③ 知識・理解をみる問題は、中間15+期末17=反応数32。
→ 生徒の点数 \div 32 \times 100で「知識・理解点」を計算。

3 授業記録から

- ① 関心・意欲・態度の判断材料として、ワーク（10点 \times 2=20点）、予習（単語調べと本文写し1回あたり各1点 \times 17回分=34点）、単語テスト（1回10点 \times 10回分 \div 2.5=40点）を採用。（20+34+40） \div 94 \times 100として算出。教科書3回以上忘れた場合は-94点（つまり、関心・意欲・態度は確実にゼロにする）。
- ② 表現能力の判断材料として、授業の始めに行う会話での回答の平均を取る。（A=4、B+=3、B-=2、B--=1、C=0 \div 4 \times 100）
- ③ 理解能力の判断材料として、授業で行った和訳プリント（3点満点 \times 2 \div 6 \times 100）。
- ④知識・理解については、テストのみ採用。

4 観点別評価の算出

- 各観点とも100%表示になっていることから、テストと授業記録を採用する観点ではそれらの平均、一方のみの場合はそのままのパーセンテージで、80%以上をA、50%未満をCとした。

5 評定

- 観点別評価（100%表示）を、次の計算式において5段階の評定とした。
=IF(R3>=93,5,(IF(R3>=90,4.1,IF(R3>=80,4,IF(R3>=70,3.1,IF(R3>=50,3,IF(R3=45,2.1,IF(R3>=25,2,1))))))) つまり、4つの観点の合計が93%以上ならば5、90%以上で4^〇、80%以上で4、70%以上で3^〇、50%以上で3、45%以上で2^〇、25%以上で2、25%未満が1となる。

6 考察・反省

- こうして評定を出した結果、2年生124名中、評定5が12名（10%）、4が35名（29%）、3が56名（45%）、2が11名（9%）、1が10名（8%）となった。1学期は評定5が13名（10%）、4が41名（33%）、3が56名（45%）、2が10名（8%）、1が4名（3%）だったので、二学期は少し厳しくなったことになる。
- 正直言ってあまりにも上位群が多くなりすぎたため、評定5をあげた生徒は93%以上と、かなり高いカッティングポイントとなってしまった。3学期には、要求水準をもっと高く設定してもいいと思われる。
- 数学科で1学期行ったように、全てを合計してからパーセンテージで表示し、「90%以上は5」などとやった方が生徒には説明しやすいように感じたため、そのようにやってみた。しかし今度は、観点がオールAなのに評定は4というズレが生じてしまった。観点がオールAなら5になるよう、計算方法を改善しなければならない。